



Title	高橋がダダ新吉になるとき : 一九二〇年夏の『萬朝報』を手がかりに
Author(s)	松田, 正貴
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 69-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70985
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高橋がダダ新吉になるとき

——一九二〇年夏の『萬朝報』を手がかりに——

はじめに

一九一八年冬のこと、十七歳になったばかりの高橋新吉（一九〇一〜一九八七）は、愛媛県八幡浜商業学校を卒業間際に退学し、父に無断で上京する。馴れない環境での貧しい生活が崇ったのか、翌年の冬にはチフスに罹り、文字通り「行路病者」として養育院に収容され、その後、故郷愛媛に連れ戻される。そもそも何を思って東京に出たのか。作家を志して上京したのか。「放浪」という行為そのものに憧れていたのか。実際のところはよく分からない。いずれにせよ、およそ二年にわたるこの放浪生活によって、高橋は改めて社会的慣習や制度的な規範に全く馴染めない「自分」、いわば「どうしようもない自分」と向き合うことになる。このことは、公表された高橋の最初のテキストである「焰をかかぐ」からも窺い知ることができる。

「焰をかかぐ」は『萬朝報』の懸賞小説コンクールで入選を果

たした掌編小説であり、一九二〇年八月一日付の同紙に掲載されたものである。『萬朝報』を「とって読んでいた」という高橋は、同紙の文化面やその記事の論調に表現のつかかりがないかと目を配っていた。以下、一九二〇年夏の『萬朝報』の言説を手がかりに、高橋の実質的なデビュー作である「焰をかかぐ」を繙きながら、無名時代の高橋が構想していた言語表現について考えてみたい。

「焰をかかぐ」については後ほど詳しく論じることにして、まずは当時（一九二〇年六月〜八月）の『萬朝報』における主な論調を確認しておきたい。主な論調とはいうものの、雑多な記事が連日掲載されているだけで、その比重は特集記事によって大きく変動する。ただ、そこをあえて図式化して捉えてみると、この時期の『萬朝報』には、拮抗する二つの言説が交差する形で配されていることに気がつく。つまり過激派によるテロ（「尼港事件」を中心に）およびそれに対する警戒と対策をめぐる記事が連日掲

松 田 正 貴

載され、それと併行する形で民主化を求める国民の「示威運動」が報じられているのである。⁽³⁾ 本来異質な二つの言説を交差させる形で紙面が構成されており、そのような論調を背景に、日本で最初にダダイズムを本格的に紹介する記事が掲載されることになる。一九二〇年八月十五日付『萬朝報』に掲載された二つの記事「享楽主義の最新芸術——戦後に歓迎されつつあるダダイズム——」と「ダダイズム一面観」がそれである。高橋の「焰をかかぐ」の公表から二週間後のことであつた。因習打破をもちろむダダイズムの紹介とはいえ、尼港事件の真相をめぐる報道が連日なされている最中のことであつて、この二つの記事においても、テロリズム擁護のニュアンスを帯びてしまわないよう言葉を選んでいる節が見られる。裏を返せば、これは、少なくとも『萬朝報』の読者であれば、その中心的な論調に沿つて、デモ、テロ、ダダという三つの言説を意識的にせよ無意識にせよ関連づけて読んでしまう可能性があつたということである。実際、高橋によるダダ受容はまさにその通りのものであつた。

「日本でアヴァンギャルド詩が一齐に開花した時代」⁽³⁾といわれる一九二〇年代前半を語る上で、その先駆者の一人としてよく引き合いに出される高橋だが、⁽⁴⁾ 一人の無名詩人が突然変異的にダダイストとして文壇に現れた、というわけではない。高橋がダダイストとして世に立つ前から既にダダイズムの到来を予感させるような言説が日本にも潜在的にあつたのであり、そのような潜在的なダダの言説を現実化する、いわば仲介者^(エージェント)として高橋が文壇に受

け入れられていったと考えることも可能なのである。つまり、一人の無名の作家が主体的にダダイストとして名乗りをあげると同時に、高橋新吉という仲介者^(エージェント)を通して、様々な言説が複合的に結び合い、「ダダ新吉」という一つの主体を作り上げていった可能性も否めないのである。以下の議論では、高橋の唯一の前ダダ的テクストである「焰をかかぐ」に焦点を絞り、その発表媒体となつた一九二〇年夏の『萬朝報』の言説と照らし合わせる形で、高橋新吉初期の言葉を検証し、その上で、一人の無名の作家が「ダダ新吉」となつていくプロセスの一端に触れてみたいと思う。

一・一九二〇年夏の『萬朝報』

『萬朝報』は、欧米の推理小説や探偵小説の翻案物で既に多くの読者から支持をえていた黒岩周六⁽⁶⁾（涙香）が、一八九二年十一月一日に発刊した新聞である。ピンク色がかった用紙を使つていたことから「赤新聞」と呼ばれていた。⁽⁵⁾ 社会的不正を執拗に掘り返し、攻撃的な「三面記事」を呼び物にする黒岩は、時の権力者たちから「まむしの周六」と恐れられていた。反体制的な論調を強く打ちだす同紙は、発行停止を命じられることもあつた。それでも黒岩は、一八九八年、『中央新聞』の記者であつた幸徳秋水を引き抜き、自社の論説記者として「自由に」書かせたりしていた。⁽⁶⁾ 黒岩は他にも内村鑑三、斎藤緑雨、森田思軒など優秀な論説記者を集めている。「三面記事」の面白さとは対照的に、手薄になりつつあつた文芸欄を活性化させるため、『萬朝報』紙上で、

週に一度、懸賞小説を募集する企画が始まる。この企画開始からおよそ二十年後の一九二〇年八月一日、第一二六四回目の懸賞募集において、高橋の「焰をかかぐ」が入選を果たし、同紙に掲載されることになる。掲載時に付された選評は次の通りである。

今回の当選候補四篇のうち「焰をかかぐ」（高橋新吉）は筆触鮮明なる印象派の絵である。題材にエル・グレコを用いた為ばかりでは無い。全体の描写の進めかたが確かに絵画の筆触である。内容的には作者の覚束ない感想を僅に見るのみであつて、どちらかと言えば技巧の勝つたものであるが、其技巧に棄て難い味があつたので採る事にした。

「焰をかかぐ」は、絵画的であるという点、さらに技巧に棄て難い味わいがあるという点で評価されたようだが、それについては後で詳しく論じることにして、当時の『萬朝報』の論調をもう少し詳しく見ておきたい。

一九二〇年夏の『萬朝報』の論調は決して明るいものではなかった。「諸株式共土崩瓦落の惨状」（六月十五日）、相次ぐ労働者の解雇（満鉄、四千人の内地人を解雇（六月八日）、コレラの発症状況と蔓延の予防と対策（「また東京に虎列刺が来るか」（六月八日）といった陰惨な記事が連日報じられていた。もちろん、このような論調の暗さは、他紙においても確認できるものではあるが、本論では『萬朝報』に焦点を絞って議論を進める。一九二〇年夏の『萬朝報』において、特に深刻な論調で展開されていたのが尼港事件後の「政治の不良状態」をめぐる議論であつた。

尼港事件とは、一九二〇年三月にロシアのニコラエフスク（尼港）で起きたバルチザン部隊と日本軍との武力衝突のことであり、結果的に日本軍は武装解除され、在留邦人らとともに被害されたと伝えられる事件である。「一九二〇年三月頃既に動向が伝えられていた尼港事件は、五月から六月にかけてその全容が」次第に明らかになってくる。六月七日の夕刊には「邦人全部殺戮 尼港生存者一人も無し」の見出しで次のような記事が掲載されている。臨時海軍派遣隊司令官報告、六月三日尼港市街の占領に引き続き要塞を占領す、尼港に在りたる残留同胞は、五月二十五日頃全部殺戮されたものの如く、マゴ（尼港の西方三十五露里）に避難し居れる露支人の妻妾たる婦人十名を除き、生存者一名もない、尚お詳細取調中

このあと原内閣に対する野党側からの責任追及の動きが高まる。事件は「不可抗力」であつたという原敬の発言がきっかけとなり、「社会的反響が一時に噴出した」のである。例えば、七月四日午後一時から「芝浦埋立地に於て内閣倒壊普選決行野外大演説会を催した、聴衆は定刻前より犇々と詰め懸けて場内忽ち満員」となり、同日同時刻に「京都市岡崎公園大グラウンド」でも示威運動があり、宣伝ビラが「数万枚」撒布されるなど抗議行動もまた烈しさを増していた（七月五日）。

ロシア人「過激派」による襲撃、政府による対応の拙さ、あるいはこの件に触発される形で勢力を増す民主化への動きなどを伝える記事と併行する形で、国内でも爆弾テロへの警戒が強化され

る（あるいはそのように報じられる）。一例として六月八日付『萬朝報』における「三〇万円を携えて日本へ入込んだ怪露人」という記事を引用しておく。

最近西比利地方から渡来する露国人中に、過激派や浦鹽の社会革命党より密旨を受けて来て、日本人や在留外国人間に巧妙な手段で過激思想を宣伝する者がある。……当局では絶えず彼等の行動を注視しているから、今の処では余り活動していないようだが去月十八日尼港の購買組合長ゴンチャラク（四〇）という怪露人が、三〇万円ばかりを携え浦鹽から東京に來た事がある。彼は尼港動乱の際石田副領事以下在留邦人を惨殺した巨頭に相違ないが、慥な証拠がないので残念ながら逮捕する事が出来なかった。

特に六月三十日の「三面記事」では爆弾テロを報じる記事が前景化されている。中央に配された三つの記事がすべて爆発物による破壊行為を報じるものとなっており、「議會召集日の夜、衆議院に爆弾 鉄骨の正門破壊」という写真入りの記事がまず目につく構成となっている。その右下の記事では、同じく衆議院前の道路において火薬が青い火を発してパチパチと燃えていたと伝えられ、その左側には「電車軌道にも爆弾」という見出しの記事もある。このように当時の『萬朝報』の論調は、尼港事件以降、外地・内地を問わず、過激化しつつある爆弾テロやアナキズムへの警戒・対策の必要性をうったえる記事が目立つようになっていた。

尼港事件の後、各地で開催される抗議デモと過激派による「破

壊行為」という本来異質な事象が交差する形で報じられる一方で、六月二十七日付の『萬朝報』では、ダダイズムに関する記事が写真入りで掲載されている。「独逸美術界の奇現象——シュヴィッターの『メルツ画』」と題するこの記事が日本における「ダダイズム」の初出であるといわれる。¹⁰⁾ シュヴィッターズの「メルツ画」とは、「バスの切符、ポスターや新聞の切れはし、ぼろ布、ボタン、様々な布地など」の廢物を芸術家のインスピレーションの赴くままに配置したコラージュ作品のことである。但しこの記事の中で「ダダ（イスト）」という語は「不真面目な芸術家たち」という意味で用いられているにすぎない。また、高橋がこの記事を読んでいたかどうかとも定かではない。少なくともこの記事について高橋はどこにも全く触れていないのである。いずれにせよ、このあと『萬朝報』に掲載された二つの記事において高橋はダダイズムを知ることになる。この点については後で再び取り上げる。ここまで一九二〇年夏の『萬朝報』の主な論調を見てきたが、このあと高橋が展開するダダイズムのシナリオがこの段階で既に出来上がっていたと見ることもできる。『萬朝報』において予め用意されていたこのような言説と高橋が具体的に関わるきっかけとなったのが、「焰をかかぐ」の入選であり、さらにその二週間後に同紙に掲載されたダダイズムに関する二つの記事であった。

二. 「焰をかかぐ」

「焰をかかぐ」は、一枚の絵から想起される複数の心象がそれ



ぞれ呼応しながら展開する物語である。冒頭では、友人に借りた本の挿絵を剃刀で一枚だけ丁寧に切り取り、壁に針で留めて眺め入る「私」の意識の流れに沿って物語が展開されていく。剃刀の下に「原稿用紙の書腐し」を敷いているところから、物書きを志す男の話であろうと推測される。脚は麻痺しており、「臭い鼻汁」が出て、「之から先も何時迄続くか知れない無味単調な生の糸を、何うして断ち切ろうか」などと思ひ詰めることもある男の話である。そのような浮かばれない「私」が、友人から借りた本の中で偶然目にした一枚の複製画によって、生きるにせよ、死ぬにせよ、「私の空想を燃やし、私を何方か一方のドン底に引き摺り込んで呉れるに違いない」と半ば自暴自棄になりながらも、心を入れ替えるきっかけをつかみ、その絵に「見惚れ」ながら過去の追憶に身を任せるという枠組みで物

語は展開する。

「私」がうち眺める絵は、スペインの画家エル・グレコ（一五四一？～一六一四）による『寓話』と題された作品の複製画である。ちなみに主人公「私」が友人から借りた本は、木村莊八編『エル・グレコ』（洛陽堂、一九一六）であると思われる。本書において木村は、エル・グレコのこの絵を「焰を掲ぐ」という題で紹介している。高橋の「焰をかかぐ」はここから取ったものである。当の複製画は五十四ページと五十五ページの間に挿入されている（図参照）。この絵について木村は次のような解説を加えている。

等身大に於て描かれた半身の若い男女は真暗なバックから浮き上り、女は蠟燭の火を炭に吹きかけている。青年と一匹の猿とが両方から熱心にそれを見ている。書面は此の特別の材料に依つて殊に明暗を烈しく分たれ、——如何にそれがグレコの実感的な単純化に於て行われていることだろう——女の外包は青く、青年は紅の服装に於て描かれていと云う¹⁾。

中央で蠟燭を掲げている人物が女性であると木村は判断したようだが、実際のところ、これは少年である可能性が高い。しかも、蠟燭の火を炭に吹きかけているのではなく、炭を熾して蠟燭に火を点そうとしているのである。この絵を高橋は次のように捉える。

この絵の猿と、右端の活劇に出る悪漢の様な男と、真中の小さい棒を持って蠟燭の芯を剪って居る男の済ました口付と、而して其の蠟燭の白い光に、横顔や胸の辺りを照らされて居

て、一見如何にも毒々しい印象を与えるが、全体の黒闇の中に、其の焰の先に、三つの者の凝視が融け集って描かれた寂しい人生の一面に、弱い乍らも強い愛の匂が漂うて居る。

木村のいう「実感的な単純化」を高橋はもう一步踏み込んだ形で捉えようとする。そこには貧しい者への共感¹²だけでなく、そのような生に対する憧れのようなものが表れており、その思いが、かつて見た二つの光景と結び合う。一つは大阪中之島の図書館から見た次のような光景である。

電燈が点つてから、川向うの電車の音が、淡い靄に包まれて快く響いて来る。何気なく下を見ると、穢い麦藁帽を被た男が、俯いて提灯に灯を点けていた。冷い絹糸の様な雨が煙る様に降って居て、堆高く荷を積んだ馬が、穏なく前足を揃えていた。其の雨に濡れた黒い二つの耳がびくびく動いていた。

その時の印象とエル・グレコの絵のイメージとが「私」の中で重なり合う。「灯を点ける」という何気ない行為が醸し出す侘びしさと切実さが両者の共通項としてここで提示されるのである。

床の上に寝転びながら「何時間も」この絵に見惚れている「私」だが、記憶はさらに過去へと遡る。「私」は父と二人で夜道を歩いている。道中「黄色い鬼火の様な光」が明滅して見え、「私」は恐ろしさのあまり父の手を固く握りしめる。実際のところそれはカンテラの光であって、「不図見ると其処の泥溝見たいな水の落ちる所に、一人の裸形の男が手拭を持って突っ立って」

いる。この邂逅の瞬間について「私」は次のように語る。

「乞食が行水して居る。」父の言った言葉迄私は明瞭思い出して居た。自然の静寂、無為、休止と言った風な、今の私の求めて止まない尊い境地を、彼等は本当に孤独な、微な、燻りきった生の焰をかがけ乍らも、得て居るのだ。唯僅かに芸術を通して私は其等の匂を臭ぐ丈ではないか。

「カンテラの光」のイメージによつてさらに回想が促され、「私」は流浪者の水浴場面をはっきりと思ひだす。ここでふたたびグレコの絵に視点を戻す「私」は、何気なく「海月打つけて棧橋の師走の灯」という同郷の俳人河東碧梧桐の句を口ずさむ。河東主宰の俳誌『海紅』に出ていたものを思い出したという。河東碧梧桐といえは「自由な表現による人間味の濃い主情的なものを大胆に表現し」、また「十七音を破壊、ついには季題をも放棄した」俳人として有名である。そこを汲んで「私」はこの句を暗唱したのであるが、その記憶が曖昧だったのか、もとの句とは少し異なっている。河東碧梧桐のオリジナルの句（一九一五年十二月）は次の通りである。

海月打ちつけし棧橋の師走の灯¹⁴

「私」はこの句を「打ちつけし」ではなく「打つけて」という形で記憶していた。本来、夏の季題として用いられる「海月」を冬の情景に持ち込むことで時の経過を端的に表出する句となっているのだが、「私」が思わず口ずさんだ「海月打つけて」という形になると、時の流れが曖昧になってしまい、海月が打ち上げられ

ていた夏の瞬間と、師走の灯という二つの現在が同時に併置されるという、いわば超現実主義的な句になってしまふ。ただ、たとえ「私」の記憶違いであつたとしても、この句の引用は物語の中軸を担うものとなっている。エル・グレコの複製画に魅了され、そこに描かれる「貧しいながらも強い愛」に「私」は心を開き、その感覚をもとに過去の様々な情景へと思いを馳せる。雨に濡れた馬と汚れた麦藁帽の男や行水する流浪者といったイメージがここで「海月打つて」の句へと収斂するのだが、その異質なものの同時的な表出というテーマはまさにこのテクストの自己言及的な解説となっている。最後に「私」はエル・グレコの絵についてもう一度このように纏める。

真中の男の肩に掴まつた、空洞の様な、猿の二つの瞳の底に、
其処からは掘つても掘つても尽きない深淵を思わす無限が潜
んでいる様だ。

行水する流浪者が得ているとされる「自然の静寂、無為、休止」といった境地を、「私」は「芸術」を通して、かろうじて僅かに「其等の句を臭ぐ」ことができる。河東碧梧桐の句に見たような、異質なものの同時的な表出、あるいはエル・グレコの絵の中の猿の瞳のような「掘つても掘つても尽きない深淵を思わす無限」、このような、言葉で表現せざるをえないにもかかわらず、どうしても言葉では言い尽くせない、いわば「非言語的なもの」への憧れが高橋の前・ダダ的な志向性としてまずはあった。「自然の静寂、無為、休止」の境地を言語化するための言葉を探しあぐねていた

高橋がこのあと出会うことになるのが、ダダイズムであり、そこでは「意味」ではなく「無意味」がきわめて有効な表現手段となる。

三. デモ、テロ、ダダ

掌編小説とはいえ、デビュー作が『萬朝報』に掲載されたことで、高橋のその後の言語活動が運命的に決定づけられていく。「焰をかかぐ」の公表後まもない八月十五日のことである。この日『萬朝報』に掲載された二つの記事（紫蘭「享楽主義の最新芸術——戦後に歓迎されつつあるダダイズム——」および羊頭生「ダダイズム一面観」）に感銘を受けた高橋は、このとき自らダダイストとして文壇に打って出る覚悟を決めることになる。以下、日本で最初にダダイズムを本格的に紹介した論考として知られるこの二つの記事について概観しておきたい。自らの書いた小説が掲載されたこともあって、『萬朝報』の記事に対する関心が当然高まつており、そのためダダイズムに関するこの二つの記事に高橋はいち早く反応できたのである。この記事の中で紹介されているダダの表現手法に高橋は自らの詩的言語のモデルを見いだし、やがて独特なダダイズムを展開するようになっていく。¹⁵⁾

当時の『萬朝報』には、民主化を求める国民の示威運動と過激派によるテロリズムという異質な二つの言説が交差する形で見られた。因習打破をもちろむ芸術運動もまた「過激派によるテロリズム」の文脈で解釈され、芸術家たちの方でもテロリズムの言説

を借用しながら、表現の可能性を切り開こうとするものが現われる。⁽¹⁶⁾もっとも、「破壊と改造」を待ち望む声は、一九二〇年夏の時点で既に、労働活動家や労働者たちの間でも広く共有されるようになっていたのであり、それが時に反政府デモという形で噴出することもあった。しかし、たとえそれが民主化を求める動きであったとしても、「過激派によるテロリズム」の言説と併行する形で報じられたならば、「安寧秩序の紊乱」の印象をどうしても払拭できなくなる。⁽¹⁸⁾

『萬朝報』掲載のダダイズムに関する二つの記事にも、そのようなりスクを回避しようとする節が確かに見られる。「ダダイズムは一種のヴォルシェヴィズムであり、ニヒリズムである。此派の首領であるといわれているツァーラは、正直にいうと、自分等は狂人であるかも知れない。狂人でもいいから、家庭も道徳も常識も記憶も考古学も予言者も未来も一切をすてたいといっている」(「享楽主義の最新芸術」という形でダダイズムを紹介しつつも、「行きつまつたといわれている近代芸術や、疲れ切った戦後の欧州人の生活の一つの噴火口と見れば見られぬでもないが、其無方針無主義無法則な行き方は、必ずしも人生及芸術の究極の進路ではないかも知れぬ」(「享楽主義の最新芸術」といった但し書きや「私の知る限りに於て、ダダイズムが独逸に於て真面目に議論されたのを聞いたことがない」(「ダダイズム一面観」というような独断的な言葉でもって釘を刺しているのである。つまり、この二つの記事は、ダダイズムを紹介するものであると同時に、そ

の極端な拡散を抑止するものでもあった。とはいふものの、もしこの二つの記事が全面的にダダを喧伝するものであったなら、高橋はむしろダダの言説にあればどこまで主体的に関わろうとしなかったのではないか。高橋が求めていたものは、既に評価が定まっている既成の概念ではなく、自らを全く新しいやり方で打ち立てるための言説、つまり『萬朝報』における二つの記事が戸惑いながら紹介しているダダイズムのような新しい言説だったのである。高橋が日本におけるダダイズムの第一人者であることに拘ったのもそのためであろう。⁽¹⁹⁾

ちなみに高橋は晩年、この二つの記事を通してダダを知ることになったと繰り返し語っている。⁽²⁰⁾一九六〇年代、「グループ・ネオダダ」などの反芸術的パフォーマンスによって、ダダイズムが再び衆目を集めるようになると、高橋も自らのダダ体験について回顧的に語り始めるようになる。『萬朝報』の二つの記事を十九歳の時に読んだと自ら証言する高橋だが、特に「感激した」のは「享楽主義の最新芸術」における次のような箇所だったという。⁽²²⁾ダダの詩に見られる視覚上の斬新さに触れている箇所である。

書かれていることは兎に角として、文字の組方が同じ頁の中に縦に組まれて居たり横に組まれて居たり甚だしきに至つては斜に組まれたりして居て、内容よりも外形に重きを置いて居るような傾向があるようにも見受けられる。

とはいえ、タイポグラフィの革新という点において、高橋はあまり目立った功績を残していない。⁽²³⁾『赤と黒』や『死刑宣告』にお

ける萩原恭次郎、あるいは村山知義らの『マヴォ』のレイアウトなどに見られる書面のインパクトに匹敵するようなものを高橋は打ち出すことができなかった。つまり、このような技術的な描写に目を奪われたことがたとえ事実であつたとしても、それによつて自らの詩的実践が新たに方向づけられたというわけではなかつたのである。「焰をかかぐ」の読解を通して先に確認した、この時点での高橋の言説的志向性と照らし合わせて考えた場合、タイポグラフィの表現性よりも、むしろ次に引用する箇所で語られているような「無意味」の表現可能性に高橋は活路を見いだした、と判断することも可能ではないか。「ダダ」という語は様々な国の言葉に既に見られるが、その定義はそういった言葉のどれにも相当しないという前置きの後に次のような一節が続く。

……芸術上のダダは「無」の意義だと伝えられている。実際彼等の一派は、「我々の感覚は、宇宙外界の真の記録でなく、永遠に比すると、吾々の行動や言語は何の役にも立たぬと発見した」と言っているというが、そんなことは必ずしも新しい発見でも何でもなく、既に幾度か色々の人によつて云い古されたことである。仏教にはそんなことは限りもなく説かれて居り、ニイチェだつて幾度かそれを繰り返している。（『享楽主義の最新芸術』）

ダダイズムの「新しさ」に異を唱える論ではあるが、高橋がダダを受容するところを確かむことができたのは、むしろこのような一節からではなかったか。「何も意味しない」というダダの

意義が、仏教的な「無」と関連づけられることによつて、当時の高橋の前・ダダ的志向性、つまり「焰をかかぐ」において「私」が求めてやまない「自然の静寂、無為、休止」といった境地と結び合う。実際、高橋自身もまたダダと仏教との間の親和性について次のように語っている。

ダダは何事をも意味しない。私は、ダダと南無阿弥陀仏を、おなじように思つて「南無ダダ」と、絶叫したりしたのを思い浮かべた。ツアラは、哲学を勉強したルーマニアの青年で、彼の明敏な頭脳に、いち早く仏教が、吸収されていたことは疑えない。仏教といっても、禅的なもので「言葉なき思想」とか「言葉はごめんだ」とかいつて、言語活動を否定しているのは、禅の不立文字と、通ずるものがあるからだ。⁽²⁴⁾

「言葉なき思想」をどう「語る」のか。このあと高橋は、ダダ、狂気、天才、禅といった様々な言説に依拠しながら、「何一つ語らない語り」という究極的な詩的言語の可能性を追究するようになる。

何もいうことはない

言葉には飽いた

他人の心を知ったところで何のたしにもならぬ

自分の心を他人に知らしたところで何の為にもならぬ⁽²⁵⁾

「何もいうことはない」といつつ、高橋は生涯、語り続け書き続ける。「自分に何も言うことがない場合、どうして、実際に、何も言わないでいいのか」という問いが当然起こりうるのだが、⁽²⁶⁾

高橋の場合、「何もいうことはない」ということは、意味の欠如であると同時に、すべてが満たされた状態でもあり、そのような地平を目指して高橋は生涯詩を書き続けた。「何もいうことはない」という、言葉の発生源のような地点から言語の問題を見据えることで、「意味とは何か」「言うべきことがある」とは何か」を高橋は問い続けたのである。

四・マックス・シュティルナー『唯一者とその所有』

「焰をかかぐ」は、高橋の前・ダダ的志向性が確認できる唯一のテキストであると同時に、高橋がダダイズムと出会うきっかけとなったテキストでもある。高橋新吉という一つの主体を越えたところで、常に既に用意されていた様々なテキストが、交差し、また併行しながら、高橋という主体に働きかけ、次なるテキストの産出を促す。本論ではこれまで『萬朝報』に掲載されたダダイズム関連記事を中心に検討しながら、高橋新吉の言語観が現出してくるプロセスを確認してきたが、「ダダの時代」における高橋の言語観を考える上で、もう一つ重要なテキストがあった。森鷗外が小説「食堂」(『三田文学』一九一〇年二月)において日本で初めて紹介したとされるマックス・シュティルナー『唯一者とその所有』⁽²⁸⁾である。

「焰をかかぐ」が『萬朝報』に掲載された後、高橋は再び上京し、利根川の河川敷のあばら家で自炊生活を始める。シュティルナーと直接関係があるわけではないが、参考までに当時の様子を

彷彿させる詩を一つ引用しておく。

水をあれだけで

入れなんでよかった

此んなにやわらかい

飯になったのに

あの上入れなんでよかった

世の中にはよい事が

やっぱしあるのだ

しゃもじをねぶりながら思う⁽²⁹⁾。

このように高橋もまた「本当に孤独な、微な、熾りきった生の焰をかかげ乍ら」生活していたのであろう。性科学者の小倉清三郎の雑誌『相對』の發送作業を手伝うアルバイトなどをしていたとはいえ、文字通り糊口をしのぐ生活であった。貧しさの中にも「生の焰」を感じ取っていた高橋が、この頃読んでいたのがマックス・シュティルナー『唯一者とその所有』であった。この難解な哲学書に感銘を受けた高橋は、その訳者である辻潤のもとを訪ね、その続編である『自我経』を借りて帰ったとされている⁽³⁰⁾。このとき辻は、名も知らぬ青年にタダで自分の本をくれてやるのは惜しいと判断し、高橋がどの程度シュティルナーを理解しているのか「試験」している。読後の感想を訊ねてみた辻潤はすぐ「そんなことを訊ねたことのセンエツさを後悔しなければならなかった」。辻がいうには「彼は実によくスチルネル「シュティルナー」を理解していた」という。高橋はタダで本をもらうのは気

の毒だといって「謄写版刷りの横トヂの詩集を二冊」「原稿のトヂたのを二冊」置いて帰る。この原稿が後に『ダダリスト新吉の詩』の一部として出版されることになる。原稿を読んだ辻潤は「それにはスチルネルの影響がかなり濃厚に出ていた」と語っており、実際『ダダリスト新吉の詩』には『唯一者とその所有』に言及した箇所が見られる。

上野の図書館の柱には、至る所に、俺は俺の俺だとか、自我経のサンタン詞が出ているじゃないか

誤訳や、誤植に感心しない様な奴は、何うせ後頭部ばかり発達した、野郎に違いない

何か貴様達に伝えなければならぬのなら俺のツタえたいものを、貴様達の解る様にざっとツタえられなくなるんだ³¹

シュティルナー『唯一者とその所有』は、理想に燃える多くの若者たちを煽動した「叛逆の書」として日本に紹介されたものであり、右の引用に見られる「俺は俺の俺」という図書館の柱の落書きは、シュティルナーの「自分は自分の勝手気儘に自分自身を享樂する」というような個人主義的な声明を踏まえたものだと考えられる。³² ちなみに高橋が最初に読んで感銘を受けたという第一部「人間篇」では、主にドイツ観念論をめぐる哲学的な議論が展開されているのだが、もし本当に高橋がこれを読み解いていたとするなら、かなり哲学的素養があったということになる。「人間篇」は、近代的「自我」が、家族や社会、国家や法、理性や道徳と

いったものに隷属する過程を分析するものである。さらに、高橋が辻潤に借りて読んだと思われる第二部「自我篇」では、個人が「自由」を獲得するためには何が必要なのかといった議論がなされる。「自我篇」において主軸となるのは、まず人間の役割に関するシュティルナーの議論である。囚人なき牢獄は単なる建物にすぎず、親と子の役割なき家族は単なる共同生活にすぎない。牢獄が機能するためには囚人が必要であり、家族が機能するためには親と子の役割が必要である、という前提から、同様に国家や社会もまた我々に様々な役割を果たすよう強制し、そのような役割に適応するための教育を施すものだと言われる。このようなプロセスを打破しないかぎり、我々は主体的に生きることができない。とはいっても、シュティルナーは「暴力的革命」の必要性を訴えるわけではない。³³ 組織的な革命ではなく、むしろ個人がそれぞれの身に差し迫った脅威や矛盾を認識し、覚醒し、「叛逆」することが重要だというような論調になっている。ここでいう「叛逆」とはつまり諸々の制度からの逃走、教育や固定観念、思想からの解放を意味するものであり、その出発点としてシュティルナーが特に着目している問題、それが「言語の拘束性」からの脱却であった。

思想から脱却し得ない人間はその点では単に人間で、言語の、この人間制度の、この人間的思想の宝庫の奴隷である。言語、即ち「言葉」が最も苛酷に我々を圧制する。……諸君は単に睡眠において無思想、無言であるばかりでなく、最も深い反

省においてさえ同様である。そうだ、その時こそ最も無想無言である。そして、この無想、この認められざる「思想の自由」、もしくは思想からの解放によつてのみ諸君は諸君自らになるのである。⁽³⁴⁾

シュティルナーのいうこの「無想無言」は、いうまでもなく「焰をかかぐ」において高橋が求めていた「自然の静寂、無為、休止」の境地と結び合う。このような同時代的な言説を巧みに吸収しながら、高橋は自らの特異な言語観を打ちだしていくのである。本論ではまず「焰をかかぐ」の読みを通して、高橋の前・ダダ

的志向性を浮き彫りにした上で、そのような高橋の志向性が、一九二〇年夏の『萬朝報』の紙面を賑わせていたデモ、テロ、ダダの言説と結び合う瞬間を捉えようとした。さらに、シュティルナーが『自我経』で展開した個人主義およびその言語観からも学びつつ、このあと高橋が独特なダダイズムを打ちだしていくプロセスの萌芽の様態について確認してきた。しかし、このような同時代的言説が高橋新吉という仲介者^{エージェント}を通して初めて具体的に現実化されることになるのは、文学作品という形ではなく、文字通り一つの「事件」においてであった。

一九二二年十二月二十二日付『読売新聞』の文芸欄に「遂ひに発狂したダダの詩人高橋新吉君」という記事が掲載されている。事件の詳細は次の通りである。

発狂当日彼は一面識ある有島武郎氏を訪問して同氏の社会に対する態度を大に難じたそうである。有島氏は驚いて幾何

かの帰国旅費と毛布一枚とを進呈して其の不明を謝したとか謝さないとかで、一方高橋はその足で加藤朝鳥、大泉黒石氏等をも訪問して『今から俺はダダを全世界に宣伝するのだ』とそれに附帯した種々の気焰を挙げた末、薄暮の夕闇と共に所謂世界宣伝旅行に出懸けたのだった。それから上野公園の真只中で寒風に吹かれ乍ら第一回の演説を了え何でも川崎町の辻氏に告別をやるべく自動車で万世橋付近まで来た折、前方に揺らつく運転手のハイカラ頭が目触りだとなつて、持ち込んだ金剛杖で殴りつけようとしたが……硝子に妨害されて遺憾にも自動車から引き下ろされ、橋上で大格闘中を巡査に発見され、警視庁に引致された結果精神的異状を診断せられて、彼は遂に狂人たることを立証せられたのだった。

つまり高橋は、タクシートの運転手をステッキで殴りつけた廉で逮捕されたのである。その後、故郷愛媛に送還された高橋は、八幡浜の警察の留置場に収容されてしまう。とはいえ、このような形で新聞に報じられたことで、当時まだ無名だったこの詩人が一躍文壇に名を馳せるようになる。高橋から詩の草稿を預かっていた辻潤は、この絶好の機会を決して逃さなかった。高橋が愛媛で療養している間に、辻潤が高橋の原稿を半ば独断で編集し、『ダダリスト新吉の詩』（一九二三）として出版してしまうのである。一般的に高橋新吉の第一詩集とされる『ダダリスト新吉の詩』だが、留置場で初めて自分の詩集を手にした高橋は、そのあまりにも複雑な編集に腹を立て、その場で詩集を破り捨てたといふ。⁽³⁶⁾⁽³⁷⁾

最後に

以上、高橋新吉というまだ無名の作家が自ら主体的にダダイストとして名乗りをあげると同時に、高橋という一つの^{「トレンジャー」}仲介者を通して、デモ、テロ、ダダという三つの言説が複合的に結び合い、メディアや文壇からの働きかけもあって、「発狂詩人」という形で一つの主体が構成されていく様子を確認してきた。高橋の「狂気」は、それ自身が純粹に突発的な出来事であったわけではなく、ある程度は先行テキストによって準備されていたものであり、そのような潜在的テキストが、「高橋新吉」という^{「トレンジャー」}仲介者を通して再構成され、表出してきたと見ることも可能なのである。

注

- (1) 高橋新吉『ダガバジンギザ物語』（思潮社、一九六五）九十
- 二
- (2) 拮抗するこの二つの力は、「大逆事件」の前後から既に目立つようになっているが、その後さらに明確な形で浮き彫りになってくる。民主主義的な政治の枠組みが形成されたことによって普通選挙法が制定されると同時に、関東大震災後の緊急勅令を経て、治安維持法が制定され、次第に思想の弾圧が強化されるようになる（普通選挙法、治安維持法、ともに一九二五年制定）。
- (3) 和田博文『日本のアヴァンギャルド』（世界思想社、二〇〇五）
- 四
- (4) 針生一郎は「ダダイストとはつきり自称したのは、詩人高橋新吉が最初」とであると断言している。白川昌生編『日本のダダ一

九二〇・一九七〇』（書肆風の薔薇、一九八八）十八

- (5) 一九〇四年十二月二十三日の四千号から用紙が白くなった。「活字が小さくなったことにより、白紙のほう印刷効果がよいとの判断である。赤新聞という悪評を払拭しようというわけではなかった。」高橋康雄『物語・萬朝報——黒岩涙香と明治のメディア人たち』（日本経済新聞社、一九八九）四四二
- (6) 「満州」を事実上占領しているロシアとの「開戦論」が世論を席巻するなか、幸徳秋水、内村鑑三、堺利彦らは、あくまでも「戦争は罪悪である」という理由で、反対の論陣をはった。やがて「萬朝報」自体が、世論からの圧力に負け、開戦論に踏み切ったことで、彼らは黒岩のもとを去ることになる。（三好徹『まむしの周六——萬朝報物語』中央公論社、一九七七、二六〇・二八六）
- (7) 三好『まむしの周六』一六七
- (8) 井竿富雄「尼港事件と日本社会、一九二〇年」『山口県立大学学術情報第2号（国際文化学部紀要）』（二〇〇九年三月）二
- (9) 「尼港事件の全容が明るみに出ると、日本社会は過剰に反応した。戦争で大量の戦死者が出る以外に、在留邦人が大量に殺害されたということ自体がなかったからである。しかも在留邦人のみならず現地にいた日本軍部隊、日本外交官まで殺害されるというのは、日本社会にとってはすさまじい衝撃だった。」井竿「尼港事件と日本社会」五
- (10) 神谷忠孝（「資料」日本のダダイズム（一九二〇・一九二二））「北海道大学人文科学論集」一九七九年三月二十一日 一
- (11) 木村莊八編『エル・グレコ』（洛陽堂、一九一六）五十四 なお、本論における引用は、いくつかの例外を除き、新字・新かなで統一した。
- (12) 「貧しい者への共感」は様々な形で表出されうる。「むやむやと

／口の中にたふとげの事を眩く／乞食もありき」という石川啄木の詩(二)「握の砂」東雲堂書店、一九一〇・一七三)のようなやや距離をおいた共感や、自ら「貧民窟生活者」として暮らす賀川豊彦の共感(「貧民窟生活者の自然美論」『雄弁』一九二〇年八月)、さらには島田清次郎のような「貧しさの快楽」といった観点から語られる共感もある(「漂泊——ゴロツキの生活は俺には止められなくなつてしまつたのである」『あるゴロツキの嘆き』『太陽』一九二〇年七月、一九八)。「貧しい者への共感」は一つの言説として一部の文学者たちの間で既に共有されていたのである。

(13) 栗田靖『海紅総目録(大正篇)』(東海学園女子短期大学国語・国文学会、一九七九)二二三

(14) 『河東碧梧桐全集 第一卷』(短詩人連盟、二〇〇二)九十七

(15) 『萬朝報』に掲載されたタダイズムに関するこの二つの記事については、中野嘉一『前衛詩運動史の研究——モダニズム詩の系譜』(新生社、一九七五)をはじめ、神谷忠孝『日本のタダ』(響文社、一九八七)や和田博文編『日本のアヴァンギャルド』において既に指摘がある。

(16) 『赤と黒』第一輯で掲げられた「宣言」は有名である。「詩とは? 詩人とは? 我々は過去の一切の概念を放棄して、大胆に断言する! 『詩とは爆弾である! 詩人とは牢獄の固き壁と扉とに爆弾を投ずる黒き犯人である!』伊藤信吉・秋山清編『プロレタリア詩雑誌集成上』『赤と黒』復刻版(戦旗復刻版刊行会、一九七八)。

(17) 一九一九年創刊の雑誌『改造』が編集方針を転換したのも、このような労働者たちの間に潜在的読者を見込んだ上でのことであつた。当初、知識人たちがターゲットにしていた『改造』だが、『編集方針に個性がなく』売れ行きも悪かつた。そこで一九一九

年七月の第四号からは、「労働問題 社会主義批判号」という特集を打ち出し、労働者や労働活動家たちをターゲットに売り出す方針に変える。結果的に多くの読者を獲得することになるが、それは同時に「当時、市販されている大手の総合雑誌のなかでは、もっとも頻繁に検閲処分を」受けるという負の側面も生じさせることになる。紅野謙介『検閲と文学——一九二〇年代の攻防』(河出ブックス、二〇〇九)五十一・五十五

(18) 特に一九二〇(大正九)年七月十日、日比谷、上野、芝浦の三カ所で行なわれた内閣弾劾の抗議デモでは、警視庁が私服警官を十七個中隊(約六百名)に編成して会場の警備にあたつたという(『萬朝報』一九二〇年七月十一日)。

(19) 「辻潤は、タダイズムに於ては、高橋新吉の模倣者であり、亜流なのだ」(高橋新吉『ダタと禪』宝文館出版、一九七一年、五十五)

(20) 『ダガバジンギザ物語』九十二、「詩と禪」(宝文館、一九六九)一九六、「禪と文学」(宝文館、一九七〇)二二三・二四二、『ダタと禪』(宝文館、一九七二)四十五など。

(21) 「この新聞記事を読んで、私はタダイズムを知つたのであつたが、満十九歳の時であつた」『禪と文学』二四一

(22) 高橋『禪と文学』二四五

(23) 日本で最初のタダ詩といわれる高橋の「倦怠(のちに皿と改題)」は、「皿皿皿皿皿皿皿……」ではじまる詩として有名だが、この程度のタイポグラフィ的インパクトであれば、神原泰のような未来派の詩人が既に実践しており、特に目新しさはない。

(24) 高橋『ダタと禪』四十五

(25) 高橋新吉『高橋新吉の詩集』(日本未来派発行所、一九四九)一三九

(26) こうした問いに対してモーリス・ブランショは、何ということ

がないからこそ語りは始めるのだと切り返す。「何ひとつ言うべきことのない人間が、いったいどうして、語りはじめおのれの考えを述べはじめようと努めぬはずがあるう。」ちなみにブランシヨが論じているのはアントナン・アルトーであり、アルトーもまた「何もいうことはない」という言語観に基づいてものを書いていた作家である。モリス・ブランシヨ『来るべき書物』栗津則雄訳（筑摩書房、二〇一三）八十三・八十四

(27) 「言葉を否定し、表現を否定し、生を否定した上で、吐き出された言葉でないと詩とは言えぬ」（高橋新吉「歌わざる詩人」『新潮』一九五四年四月、一一五）

(28) 大沢正道『個人主義——シュティルナーの思想と生涯』（青土社、一九八八）二二八 辻もこの森訳の書名をそのまま自らの訳書に付している。

(29) 高橋新吉『ダダリスト新吉の詩』復刻版（日本図書センター、二〇〇三）二〇〇・二〇一 以下、『ダダリスト新吉の詩』からの引用はすべてこの版に基づく。

(30) 『ダダリスト新吉の詩』の跋文において辻潤は、初めて高橋が訪ねてきた用件について「彼の尋ねて来た用事と云うのは、前から僕に会いたいと思っていたことのほか、その頃僕の出した『自我経』が読みたいが、高いので自分には買えないから、もし手許にあるなら貸してもらいたいと云うのであった」と述べている（二八七・二八八）

(31) 高橋『ダダリスト新吉の詩』一一三

(32) 辻潤『辻潤全集 第六卷』（五月書房、一九八二）四八四

(33) 安直なアナキズムを警戒しつつ、シュティルナーは「ある特別な自由に対する欲求は常に新しい支配の目的を含蓄している」（辻『辻潤全集 第六卷』二四九）と述べ、国家に歯向かう者は結果的にやがて「新しい支配」を築く破目に陥ると戒めている。

(34) 辻『辻潤全集 第六卷』五二二

(35) ちなみに神谷忠孝はこの（『発狂事件』）がパフォーマンズであった可能性を示唆しているが、発狂の真正性はともかくとして、この事件によって高橋の名が「売れた」ことは確かなようである（『日本のダダ』一〇〇）。

(36) 『高橋新吉全集Ⅰ』（青土社、一九八二）解題によると、著者自ら制作した謄写版刷りの冊子「まくはうり詩集」（一九二一）が第一詩集であるということだが、「数十部作ったが、一部も金にならなかった」という点などを踏まえ、本論では通説通り「ダダリスト新吉の詩」を高橋の第一詩集とする。

(37) 高橋『ダガバジジンギズ物語』一五三

(38) もちろん、高橋が「ダダ新吉」となるプロセスは複雑なものであり、このような図式ですべてを捉えることができるわけではない。例えば、鶴岡善久が指摘しているように、この間、高橋は出石寺の小僧となり、一九二二年五月には「徴兵検査」を受けている。「一枚の葉書によって寺から呼びもとされいやおうなく徴兵検査を強制されることは高橋新吉の内面に重い澱を残したはずである。いわば高橋新吉はこのときはじめて強大な秩序Ⅱ国家と対決せざるをえなかったのである」（鶴岡善久「不在の証明——高橋新吉の詩」『詩学』三〇（四）一九七五年三月、七十三）このような要因も、高橋が「ダダ新吉」となっていくプロセスに大きく関わっていたにちがいない。

（まつだ・まさたか 大阪電気通信大学講師）